

# 火焰型土器を 2020 年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に

かつて岡本太郎を驚嘆せしめた縄文時代中期、新潟県長岡市馬高遺跡の火焰土器。大仰な四つの突起をもつ火焰型土器は、約五千年前の縄文土器の典型である。火焰型土器の造形美には、ひとつの隙さえない。

縄文土器が、一万五千年前の日本列島に登場したのは、人類史上における奇跡ともいえるべき大事件であった。縄文土器は、北は北海道北方四島、南は九州からはるか南西海上の沖縄諸島にまで行き渡った。方言ことばに似て、各地域に独特な様式が生起したが、それぞれの地方色を超え、口縁の突起を共通にする。

土器の本分は、容れ物の機能である。それゆえ口縁の突起は、土器の使い勝手に直接関わらない。むしろ土器へのモノの出し入れの障害になる。また相当量の粘土を消費し、その手間もばかにならない。大仰な突起は文字通り無用の長物といってよい。古今東西のヤキモノに突起がほとんど見当たらないのも当然で、縄文土器の突起が特別な主張であることを示す。それは単なるカタチの問題ではなく、縄文人の世界観に関係するコトを示唆する。

つまり、縄文土器には日本列島に生きた人びとの力強い確かな意志の表明があり、日本の歴史に厳然たる存在感を示している。その意味で縄文土器は、浮世絵や歌舞伎とともに、日本文化そのものなのである。

かくて、火焰型土器を2020年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台へと昇華する提案は、現代日本の意志を国際舞台に発言することにほかならない。



NPO ジョーモネスクジャパン理事長  
小林達雄

